日本民放クラブ会長
大久保　好男

年頭にあたって

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

令和七年は「巳年」。古い皮を脱ぎ捨て、趣味を深め、人生の新たなステージを目指す年です。

思想家の安岡正篤さんは「縁尋機妙、多逢聖因」（えんじんきみょう、たほうしょういん）という言葉を残しています。「良い縁がさらに良い縁を尋ねて発展していく様は誠に妙なるものがある。いい人に交わっていると良い結果に恵まれる」という意味だそうです。

尊敬する垣添忠生・国立がんセンター名誉総長は昨秋、『Dr.カキゾエ歩く処方箋』を出版しました。2年前の81歳の時に東日本大震災の爪痕が残る「みちのく潮風トレイル」1000kmを歩き通した記録です。垣添さんは、出会った多くの人から「希望があれば生きられることを学んだ」と綴っています。この本は映画化され、今夏公開。

良い言葉は栄養です。今年も健康第一に、仲間の輪を広げ、同好会の活動を盛り上げてまいりましょう。

北海道民放クラブ会長
新蔵　博雅

2025年が明けました。北の大地から新年のごあいさつを送ります。

今年は昭和100年、戦後80年の節目。きっとマスコミの記念番組、特集記事が競い合うはずです。

同期入社の友人は最近、カラオケでよく小林旭の『遠き昭和の…』を歌い、私も唱和したりします。

この曲が流れるたび、自らの失敗体験などが蘇り、ほろ苦いものが込み上げて来るのです。

セクハラなんて概念もなく、ネットメディアも芽ばえていなかった昭和の歳月。

今となっては不適切過ぎることも多々ありましたが、同世代の飲み会では、回顧談が弾みます。

民放クラブの仲間たちとの酒席でも必ずと言って良いほど「まぶしい時代」のあれこれで盛り上がります。

能天気と思われるでしょうが、老後の日々の活力源、大切なアクセントです。

さあ、新しい年の手帳にはどんな予定が記されるでしょうか？

東北民放クラブ会長
水上　健治

あけましておめでとうございます。猛暑に見舞われた昨年でしたが、地球温暖化はここ数年続いており、今年もその傾向は続くと予想されています。また、政局の混乱も続く恐れがあり、安心しておれません。

我が民放界は、ここ数年メディアの多様化により経営環境は著しく厳しくなっています。加えて少子高齢化の影響によりクラブの会員数は減少し、各地区ともに悩んでいるのが現状です。この会員減に歯止めを掛ける為に昨年、会則を一部変更し、会員対象を増す方向を模索するなど努力をして参りました。ただ、民放クラブとしてその範囲をどこまで広げるのかは各地の状況により若干差があり、運用に違いが生じる事は否めないでしょう。

このような状況下ですが会員諸氏の更なるご奮闘により、明るい活動の場を作り上げて行きたいと考えております。

日本・関東民放クラブ理事長
榎本　恒幸

明けましておめでとうございます。

10月開催の九州民放クラブ代表者会議に出席して、日本民放クラブ規約改定が実を結びつつある事を実感しました。配偶者、広告会社、関連会社、料理番組の出演者の方の入会報告がありました。この流れを確実なものにしていきましょう。

また、その会議で驚いたのは、宮崎民放クラブのゴルフ同好会の盛況ぶりです。

令和5年度の活動実績はなんと年間11回。地の利、人の和に恵まれているとはいえ、この活動ぶりには頭が下がります。リタイア後の懇親の場を作ることが民放クラブの目的です。この目的に沿った活動をされているのが宮崎民放クラブ・ゴルフ会だと感心しました。

民放クラブ規約改定というマクロの課題が一段落しましたので、これからは同好会の活性化という草の根の課題に目を向けていきたいと思いました。

北陸民放クラブ・富山会長
森　元

あけましておめでとうございます。

新型コロナの感染も漸く落ち着いた矢先の昨年元日。能登半島地震が北陸地方を襲いました。この地震が発端となり、昨年は日本各地で自然災害が続きました。

阪神淡路・東日本大震災を経験し、自然災害による官民一体のリスク、危機管理、自助、共助が叫ばれた一年でした。

一方、昨年3月16日から北陸新幹線は金沢以西の敦賀までが延伸し、東京・敦賀間は最短3時間8分で結ばれました。

この延伸を記念して富山、石川、福井の3クラブは、昨年10月「敦賀日帰り旅行」を実施しました。

3クラブの交流が従来にも増して盛んになることが期待されます。

日本民放クラブ総会での規約改定に準拠して、富山クラブでは、今年4月の総会に向けて会員資格の規約改正を進めています。

東海民放クラブ会長
山中 強司

新しい年が始まりました。昨年は年初から能登地方を大地震が、その復興中には豪雨が襲いました。世界に目を向けると、ウクライナや中東では戦禍が未だ続いています。早い機会に終息し、穏やかな一年となることを願うばかりです。

さて、当クラブの現下の課題は「会員増」です。既存会員への目配りもしつつ、新規の会員を迎えるにはどうすればいいか？ 原点に立ち返って、当クラブの魅力や意義を考えてみました。

「同じ業界で働き、時にはライバルだった人たちと旧交を温め、当時の思い出を懐かしく語り合える」とか「いろんなイベントや部活動に参加して、新しい友達を作ることができる」「昔の仲間の消息を知るツールとなる」「雑談する機会が増え、ボケ防止にもいい」など。ChatGPTにも問いかけてみましたが、特別に目新しいものはありません。魅力の再確認を会員増へのツールとして、今年の活動に生かしてゆければと思っています。

関西民放クラブ会長
渡辺 克信

当クラブは新年から新しい事務所で仕事始めです。

昨年の同好会活動では、〝男もすなる飲み会を女もしてみんとて…〟で発足した女性のみの食事と催事を愉しむ「すみれの会」と、社会貢献をめざした小劇場あり、バンド&歌あり、健康志向の指ヨガありで「ボランティアの会」が新しく活動を始めています。また、年末には諸事情で24年以上使い慣れた事務所から移転しました。事務所が革袋というわけではありませんが、新しい革袋にどんな新しい酒が盛られ、どのような新たな事が産まれるでしょうか？ 楽しみです！

大阪では4月から半年間万博が開かれます。前回の万博は入社間もない時でした。広い会場を走り回った事を懐かしく思い出します。これもまた楽しみです！

中国民放クラブ会長
安東 善博

明けましておめでとうございます。今年は広島・長崎に人類初の原子爆弾が投下されて80年です。その前年の昨年10月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）にノーベル平和賞が授与されました。

日本被団協結成から68年。一貫して核抑止論を否定し、核兵器廃絶を訴え続けてきた団体に、なぜ今！

ウクライナで、イスラエルで、核兵器が使用される恐れが現実になりつつあるからでしょう。

「喜んでばかりはいられない。平和賞は核兵器廃絶の運動をもっと広め、強めなければ、と言っているのだ」。これが被爆地の受け止めです。そして平均年齢85歳の被爆者は「若者たちと手を組んで」と言っています。

被爆80年は、日本がアジアで戦争の過ちを犯して80年でもあります。「二度と過ちを犯さない」よう、私たち〝ヒロシマの老放送人〟も若い人たちと共に前へ進みます。

四国民放クラブ会長
笹岡 高志

会員の皆様、新年おめでとうございます。愛媛の白方長廣氏（南海放送）からバトンを受け継いだ、高知放送の卒業生です。

郷里に帰った1973年、県人口は93万人でした。半世紀後、何と65万人にまで縮みました。地域にとって人口縮減は真に厳しいボディーブローです。

昨年の高知は嬉しいテレビ中継に湧きました。92年ぶりのオリンピック金メダル。レスリングの初々しい男女2選手が大きな夢を叶えました。続くパラリンピックでも池透暢主将（高知県出身）率いる車椅子ラクビーが弛まぬ努力で初の頂点に立ちました。

喜びの輪を繋げ、広げたい！ 小さな手応えを積み重ねることです。設立当初の思いに立ち返り若手（？）の参加を呼びかけます。

昨年、日本民放クラブ総会に初参加し、県域ごとに努力する大切さ学びました。年間5人から10人の会員増が目標です。

新たな一年が輝かしい年となりますように、ご祈念申し上げます。

九州民放クラブ会長
野村 勇

明けましておめでとうございます。九州より新年のご祝詞を申し上げます。

昨年は、異常気象に翻弄された1年でした。能登の地震災害をはじめ、各地を見舞った風水害に心を痛めました。秋の訪れを拒んだ夏の猛暑は、限界を越えたものでした。

それでも、民放クラブは元気です。昨秋には、九州5県（熊本・鹿児島・宮崎・大分・福岡）の代表者会議を、持ち回りの福岡で開催。来賓の日本クラブ榎本恒幸理事長を囲んで、建設的な議論が交わされました。

会員資格に家族や関係会社出身者も含める、大幅な会則変更に伴う活動の広がりが今年の課題です。

新年の干支は「巳」。復活と再生を意味するとも言われます。民放クラブの仲間の輪が広がり、一皮向けた楽しいクラブに再生できますよう願っております。